

「偽りのない愛」

ローマ12：9－11

堀田修一 24・7・7

I 「愛に偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れないようにしなさい」：9。

1. 愛においてこそ私たち主の教会の一体性が現実のものとなります（Iヨハネ4：16）。

「愛がなければ、何の役にも立ちません」（Iコリント13：3）。父・子・聖霊なる三位一体の神は、純粋な愛、偽りのない愛で私たちを愛し続けておられます。先行的な愛を感謝します。「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです」（Iヨハネ4：21）。「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、不正を喜ばずに、真理を喜びます。すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。愛は決して絶えることはありません」（Iコリント13：4－8）。私たちは、主にこの愛で愛され続けているのです。この「愛（原語：アガペー）」という言葉を「イエス様」と置き換えても、すべての愛の内容が当てはまります。※読んでみましょう。つまりこの「愛の讃歌」は、イエス様に対する讃歌であり、主イエスを通していかに絶大な恵みが私たちに臨んだかという事実を示しているのです。私たちは、この主の愛と恵みをいただいているので、私たちも愛の人に変えられ続けるというのがローマ12章の趣旨。そのためにも、今年度の目標である「キリストの愛にとどまり」続けましょう。

2. また、12章の愛の実践は、御霊なる神の実が先行している恵みともつながっている→私たちの心の中で結んでくださる「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です」（ガラテヤ5：22，23）。愛とは御霊によって与えられる賜物です。

3. 主の教会における愛は、先行的主の愛と真理である聖書のみことばに基づいた真実な愛です。偽り（原語：偽り、偽善）は、人間関係を引き裂き、真実な愛だけが、主の教会、主にある人間関係を育てます。「偽りがあってはなりません」とは、愛の行為が演技であり、お芝居であってはならないという意味です。演技やお芝居から偽善が生まれる。偽善とは、愛の行いの真の動機が不純ということです。ある計算、見返りを求める動機、人を利用する動機もある。罪の世では、偽りの愛であふれています。愛しているふりをされ利用され、だまされ、詐欺や裏切りが横行しています。真実な愛の主を信じるキリスト者の交わりにおける愛は、あくまで真実で純粋であるように祈りたい。詐欺や悪に利用されていることを見抜く識別力のある愛を祈り求めたい。

4. 主がくださる真実な愛は「真理（聖書のみことばの教え）を喜びます」（Iコリント13：6）。ガラテヤ2：11－14には、アンテオケの教会で、ペテロは異邦人の信徒たちと、何の分け隔てもなく食事を共にしていたが、ヤコブのもとからある人々（ユダヤ人と異邦人を分け隔てる律法主義の人々）が来た時、（人の目を気にし）身を引き離れて行った。「そして、ほかのユダヤ人たちも彼と一緒に本心を偽った行動をとり（直訳「偽善を行い」）…彼らが福音の真理に向かってまっすぐに歩んでいない」（ガラテヤ2：13，14）。「愛には偽りがあってはなりません」

とは、福音の真理にそむくという偽りも含んでいます。私たちは、主から愛され（私たちの罪の為に十字架で死なれるほどの愛）、聖書の真理を喜ぶ者となれるように祈りたい。

5. 「悪を憎み、善から離れないようにしなさい」：9。神が下さる真理に適った真の愛は、安易に悪に調子を合わせず、悪を嫌い憎みます。神は、私たちの悪、罪を憎み嫌い、その罪を主に負わせ主が私たちの罪、悪の刑罰を受けられ、悪は悪として正しくさばき、神が義であることを示されました。かつ、神は私たちの悪、罪は憎まれますが、罪人である私たちを愛して滅びることを望まず、主の十字架と復活により私たちの救いの道を設けられたのです。神は、罪と罪人を区別し、罪を憎み、罪人を愛し、罪を認め悔い改め主を信じる者を救われるのです。その神について行く私たちも、罪、悪を憎み、神の喜ばれる善、正しさから離れず全うできるように祈りましょう。善とは人間的な善ではなく神のみこころに適う善です。

Ⅱ 「兄弟愛をもって互いに愛し、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい」：10

1. 「兄弟愛をもって互いに愛し合い」。このみことばを説き明かす他のみことばがあります→「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ13：34）。ここでも、私たちが互いに愛し合う前に、主の先行的な愛「わたしがあなたがたを愛したように」とあります。主は、神であられるのに、私たち人間の救いの為に人となり、「皆のしもべになりなさい（人を支配する者ではなく、仕える者になりなさい）。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを（人間の罪の身代わりに十字架で死ぬ）与えるために来たのと、同じようにしなさい（私たちの場合、人に命を与えるとは、人に純粋な偽りのない愛を与えること）」（マタイ20：27, 28）と言われました。「互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたが私の弟子であることを、すべての人が認めるようになります」（ヨハネ13：35）。教会の互いの間に愛があるなら、教会に来た人々が主を信じる恵みに与る。「父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つ（真理と愛で）にしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです」（17：21）。※このみことばは、4つの団体が1つとなり、JECAが発足する土台となっているみことばです。

2. 「互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい」：10。私は、主を信じ、人の見方が変えられ続けています。一人一人を神が造られたかけがえのない尊い存在として見、人々を尊敬するのです。その神の視点に立つ真の尊敬は、人間の間で序列を作り上げ、何とかして自分の順位を上げようとする背伸びを根源的に打ち破ります。むしろ逆に、相手を自分よりすぐれた者（神は、それぞれにすぐれた賜物を与えておられるという認識、相手の長所を見つけ引き出す愛※ある方の証し）として尊敬し合う。それは、自分が主の十字架なしに永遠の滅びに値する罪人のかしらと深く自覚すると共に、相手の中に神の恵みが宿っていることを認めることによるのみ可能となります。神の絶対的な恩恵は、一切の量的比較を越えるものであり、人は神の前に、無条件に頭を下げるほかないからです。

Ⅲ 「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい」：11

1. 「勤勉で怠らず」。勤勉とは、あれもこれも引き受け、忙（漢字：心を亡ぼす）しくすることではない。真の勤勉とは、神と深く交わり神に聞き、識別力をいただき、神が導かれる奉仕、愛の

業を選択し祈りつつ心を込めて喜んでやることです。マルタとマリヤの姿（ルカ10：38－42）。まず主のことばに聞き入り、主の喜ばれる奉仕を喜んでする。

2. 「霊に燃え」。人間的な一時的な熱心ではなく、主の恵みを常に数え感謝し、御聖霊により愛、喜びをいただいて心を熱くしていただいて奉仕、愛の行為を感謝をもってさせていただきたい。
証：痛みの中。

3. 「主に仕えなさい」。私たちの救いのために「自らを低くし、死にまで、それも十字架の死（人間の身代わりに神に呪われた者としての死）にまで従われました」ピリピ2：8。このへりくだりと暖かい愛の主にとどまり、感謝しつつ主に仕え、主の愛で仕え合い、愛し合いましょう。応答の賛美：362「互いに愛し合い」をもって神を心から賛美しましょう。